森林と人との持続可能なつながりを目ざす森林酪農

report

新たな循環モデル「森林ノ牧場」―アミタ株式会社・森林ノ牧場 那須―

冬枯れの森林の中で牛たちがのんびり。「森林ノ牧場」では約8haの敷地内を牛は自由に歩き回り、主に森林の下草を食べて暮らす

牧場内を案内してくれたのは、アミタ株式会社循環社会センターセンター長の内藤弘さん。話をうかがっている間にも、好奇心旺盛な牛が近づいてくる

2頭の仔牛が、特別に区切られたエリアに放牧されており、見学に訪れた子どもたちと仔牛とのふれあいの場にもなっている

ここでは雑穀の栽培にも取り組んでおり、新たな商品開発も検討している

ジャージー種の生乳の特徴は乳脂肪分の高さ。牛乳本来の味を損なわないよう低温殺菌されている「森林ノ牛乳」のファンは多い。乳化剤や増粘多糖類などを入れていないソフトクリームやアイスクリームも販売

牧場内にあるカフェ。曲線を描く壁と奥の建物「蔵」はストローベイル（藁ブロック）を積み上げてつくられたもの。牧場には見学コースもあり、環境教育の場としての活用が考えられている

「アミタ株式会社・森林ノ牧場 那須」問い合わせ先

アミタ株式会社
〒102-0075 東京都千代田区三番町28番地
TEL:03-5215-8239

森林ノ牧場 那須
〒329-3224
栃木県那須郡那須町大字豊原乙627番地114
TEL:0287-77-1340
森林ノweb http://www.shinrinno.jp

毎日、朝夕2回、牛たちは自発的に搾乳場にやってくる。建物の中は衛生的で、人が立ったままの姿勢で無理なく搾乳できるよう工夫されている

森林の新しい価値を創り出す試み

冬の夕暮れ、丘の下から静かに登ってくるのは一群の牛たち。ゆっくりとした歩みで搾乳場がある建物に近づいてくる。毎日、朝夕の2回、張った乳を搾ってもらいに自分たちで戻ってくるのだそうだ。

ここは栃木県の那須にある「森林ノ牧場」。その名の通り、起伏のある森林の中で乳牛が一年中24時間放牧されている。日本のほとんどの牧場では、乳牛は牛舎で飼われているが、ここ「森林ノ牧場」では、牛たちは自由に森林の中を歩き回っている。ジャージー種の牛は寒さに強く、雨の日でも雪の日でも外に出たまま。大きな瞳を輝かせ、人がいても驚いた様子を見せずに近づいてくる。そんな牛たちを見ていると、森林の空気も穏やかに感じられる。

しかし、この山や森林も以前は放置されていて、荒れ果てた状態だったという。

「牛が入ることで、森林の中の下草を食べてくれる。そして、地面がならされてくると、間伐などの作業がしやすくなり、光が差し込む森林にすることができる。森林の中での牧場の運営は、森林再生のひとつの実験でもあるのです」と、この牧場を運営する環境ビジネス企業、アミタ株式会社の内藤弘さんは説明する。

かつて薪炭林などとして利用されていた森林や里山は生物の多様性に富んだ場所だった。人が活用しながら保全することで、人の暮らしと自然との調和が保たれていたのである。その関係性が失われてしまった今、循環のモデルを新たに生み出さないかぎり、持続性のある森林の再生は難しい。

同社はその企業活動の中で日本林業の衰退と森林の荒廃に直面し、「森林を活用し保全しながら経済的にも成り立つしくみを見出したい」との思いを強くしていったという。その結果考えられたのが、酪農との組み合わせだった。牛が森林の中で自生する草木を食べ、森林の環境を維持しながら、牛乳という恵みを人にもたらす。「これなら、自然の循環を取り戻し、森林に新しい価値を創り出すことができる」。

こうして「森林ノ牧場」は、07年12月にまず京都の京丹後市につくられ、次いで那須でも09年7月から開業した。ここ那須では現在、全面積約8haに10頭の搾乳牛がいる。

「森林の広さと牛の頭数を考慮しつつ、適切な森林管理に努めています。森林の環境を維持しながら、牧場を運営していくためにはどうすればよいのか。自然と人と酪農が共存共栄できる、均衡点を今探しているところです」と内藤さん。

酪農だけでなく林業や農業、そして観光や教育をつなぐ循環モデルを、この森林酪農を通して実現するのが次の目標だという。中山間地での持続可能な産業を生み出す可能性を秘めた、この新しい試みに期待したい。

（文責・CEL編集室）